

コラム1 防府市消防職員の活動より（平成21年7月中国・九州北部豪雨）

「Promise」

防府市消防本部 消防副士長 宮本 裕香

「先輩、必ず生きて帰りましょうね！」 「ああ、必ず・・・」
雨に打たれながら、現場の屋根の上で交わした先輩との約束。
もう生きて戻れない・・・死を予感した瞬間、こう言わずには いられなかった。

平成21年7月21日 その日は、一本の招集連絡から始まった。
本部に到着し出動に備えていると、指令が鳴った。
「本署 救助指令。車が土砂に埋まり、負傷者あり。」
私は、救急隊として出動した。
現場は、いつも通る走りやすい道。しかし、その日は違っていた。
流れ来る濁流と石に妨げられ、前へ進めない。
やむを得ず、現場よりかなり手前に車両3台を止め、13人それぞれ徒歩で現場へ向かった。

そして、それは起こった。
坂の上から、巨大な岩と鉄砲水が信号よりも高いうねり、ダンプカーをも巻き込みながら、真っ黒な壁のように迫ってきた。
間一髪で高台に逃げることができたが、逃げ遅れた仲間や市民は目の前を流され、消防車も原型を無くしていた。

その時 無事を確認できたのは、一緒に逃げた先輩ただ一人。
そこに助けを求める人がいたので、先輩と救助に取りかかった。
とその時、今度は私たちがいる山の上が崩れた。

もうだめだ・・・。

私はその後、災害の度重なる恐怖により、大きなものを背負うことになった。
PTSDである。
水の流れる音に恐怖を覚え、小石が転がるたびに全身がこわばる。
それでも、震える手をスコップで押さえ、こらえきれない涙は汗でごまかし、逃げ出したい気持ちと戦いながら、現場へ戻って活動を続けていた。

被災した隊員のメンタルヘルスケアが行われたのは、発災から10日以上たった、行方不明者の救出活動終了後だった。

ではなぜ、こんなにも対応が遅れたのか。

私が思うに、かつてない大災害に組織は翻弄され、被災した隊員のPTSDを把握できなかった。

なぜなら、心の傷は外から見るができないからだ。

そして、PTSDであることを自らが隠そうとしてしまったのだ。

上司から声を掛けられても「大丈夫です」と答えてしまった。その時なぜか、そう言わなければならないような気がしたのだ。消防士としての使命感や、まさか自分が・・・という思いからかもしれない。

そんな状況の中、私がこうして元気に消防士を続けていられるのは、同じ体験をした仲間がそばにいてくれたからだ。

今にも折れてしまいそうな心の私を支えてくれたのは、カウンセラーをも超え、気持ちを共感し合える「仲間たち」以外の何ものでもない。

心の闇に埋まってしまいそうな小さなことまで一緒に語り合うことで、ゆっくりと解き放された。

そうなれた今だからこそ、声にしなければならないことがある。

想像もできない現場に出動する私たちは、まず目の前の現実と向き合わなければならない。

そして次に、自分自身と向き合うこと。心を鏡に映して見る事はできないが、心の声に耳をかたむけ、その声を言葉にするのだ。

そうすれば、閉ざされそうになる心の扉が開き、要救助者や仲間、そして自分をも救うことができる。

今わたしがここにいられるのは、あの約束を果たせたから。

あの現場から、

そして、自分自身の閉ざされた心から生きて帰れたから・・・。

あなたも約束してください。必ず生きて帰ると。